# 土橋萬歲

笑福亭　松鶴　口演

朝賀大鱗書

ヘイ、どうぞ相變りませずお引立の程をお願ひ申します、何か新年に相應しいお噺をと心得まして、土橋萬歲と云ふのを一席御機嫌を伺ひます。此の萬歲も、三河萬歲、東京萬歲、名古屋萬歲、大和萬歲と其土地々々で多少演り口が違ひまして、お正月には家々の軒先へ行て芽出度い柱建てなどを唄て歩いた物でござります。此内の名古屋萬歲と云ふの丈けは時とんぼ無しに流し歩いて居りましたが、段々普通の數へ唄位では人も相手にせぬ處から、鳥渡輕口の眞似事の樣な事を演り出し、時たま場末の寄席などで興行をする樣に成りました。是れが茲一寸前頃まで豪い勢ひで流行した漫才の始まりで有る事は、誰方もよふ御存じて御座りますが、元は太夫と才藏とがハツキリ分れて有つて、太夫は松に鶴の模樣を畫いた袴。才藏は檳榔樹の黑紋附に荒い縱縞のカルサンをはきましてな、大阪附近では



まア大和が本場として御座りました。俗に大和根性牛根性と申します位、大和の人は辛抱が强ふムりますので、昔船場邊りで、奉公人を置きますのに、大和の子供か江州の子供が一番嬉ばれた相で大阪生れがいつちぺケやつた、と云ふのは臺に辛抱と云ふ物がムりまへん。其の上親の家が近い物やさかい、鳥渡した事が有ると直ぐに泣いて歸りよる。それで大阪生れの子供は何處へ往ても嫌やがられましたが、中には大阪生れを撰り取た商賣がムります。何やと申しますと落語家で、言葉に訛が無いので、是丈けは大阪生れに限りましたが碌な物に向きや致しまへん。

『コレ定吉、お前そこで何してるね』

『貴方はんの番をしてますのや。あんまり極道をしてだすさかい此離座敷へお入れ申して御座りますねが、一寸油斷すると直きに脫けて出なはる。夫れで斯樣してチヤンと番してますのや』

『何や手に持てるや無いか』

『ヘエ、割木だす』

『それ何にするのや』

『若し貴方はんが出掛けてだしたら、是れで向ふ脛を撲きまんね』

『犬見たいに思ふて腐る。……まアそんな處にジツと佇つてんと、此方へ這入り、サア茲にこんな菓子が有る、食べて見、美味いで。お茶汲んだげよか。一邊手を出して見、夫れ二十錢の銀貨や。お